

【研究ノート】

三島中洲と阪谷芳郎

——『関係書簡集』の分析を中心に——

車田 忠継

はじめに

昨今、歴史学の分野では、大学史研究の進展が著しい。例えば二松学舎大学では、二〇二七年の創立一五〇周年に向けて、舎史編纂事業が始まっている。また専修大学の場合、大学史資料室が設置され、筆者も担当している学生向けの「専修大学史」の開講のみならず、毎年の『大学史紀要』や関連する史料集の刊行などに取り組んでいる。専修大学編『阪谷芳郎関係書簡集』（芙蓉書房出版、二〇一三年）は、その成果の一つである（以下『関係書簡集』）。この『関係書簡集』は、約四二〇名の差出人の阪谷芳郎宛書簡約一、三〇〇通を翻刻しており、内四〇通は二松学舎の創立者である三島中洲のものであった。¹本稿で論じるように、両者は岡山県出身ということで、地縁で繋がる関係にあった。

この阪谷に関して、近年、西尾林太郎『阪谷芳郎』（吉川弘文館、二〇一九年）が刊行された。西尾は阪谷の生涯を修学期（出生～東大卒業までの二二年間）、大蔵省時代（入省～蔵相辞任までの二四年間）、蔵相辞任から貴族院議員となるまでの九年間（含三回の洋行や東京市長）、貴族院時代（貴族院男爵議員に互選されてから死去するまでの二四年間）に分けて、豊富な史料を多角的に分析し、その事績を詳らかにした。残念ながら、同書に中洲や二松学舎をめぐる記述はないが、後述するように、阪谷は確かに中洲や二松学舎と深く結びついていた。そこで本稿は、同郷の中洲と阪谷の関係を解き明かすため、『関係書簡集』所収の阪谷宛中洲書簡を中心に、学校法人二松学舎が所蔵する書簡、国立国会図書館憲政資料室が所蔵する「阪谷芳郎関係文書」、二松学舎大学附属図書館シリーズ図録『三島中洲と近代』などを分析していく。しかし地縁という同郷者同士の連携に関しては、竹永三男による県人会（同郷会）

研究を始め、多くの蓄積がある。例えば成田龍一は、東京などの都市空間にいる者が「故郷」をアイデンティティの核にしている」と指摘した。また清水唯一朗は、官僚の世界の「地方閥」の存在を指摘した。そして旧柳河藩主立花家を分析した内山一幸は、中央と地方（郷里）を結びつける組織として、旧藩主家を位置づけた。さらに戦前期普選の選挙システムを論じた拙著では、川島正次郎（立憲政友会）が地縁に依拠して千葉県第一区で展開した選挙運動の実態を解き明かした。総じて日本近代社会における地縁は、人々を繋ぐ回路に他ならなかった。

そのような中、永江雅和の研究は示唆に富む。すなわち永江は『関係書簡集』を総体的に分析し、阪谷が父朗廬と岡山県人に立脚するネットワーク、洪沢同族（洪沢栄一は阪谷の岳父）としてのネットワーク、大蔵官僚としてのネットワーク、専修大学創設者とのネットワークを持つと論じた。加えて永江は、阪谷が漢学のネットワーク、教育者のネットワーク、地元岡山県の人脈を持つとともに、地縁のカウンターとしての「学閥」ネットワークを持ち、その人脈が極めて多面的であるとも論じた。この永江の指摘を踏まえると、同郷者同士の連携を分析する際、地縁以外の媒介項を併せることで、それはより重層的なものとして描き得るといえよう。

本稿は、以上の視角にもとづき、家庭人としての中洲、郷土を同じくする者としての中洲と阪谷の関係、阪谷と二松学舎と

の関わりを分析し、日本近代社会、とりわけ明治期日本における同郷者同士の連繋のあり方を改めて明らかにするものである。そして、ここで得られるであろう成果を二松学舎史研究に落とし込み、今後の展望を示したい。なお、かつて筆者は今後の二松学舎史研究の課題の一つとして、阪谷の中洲宛書簡の分析の必要性を指摘したが、本稿は、その回答としても位置づけられる。

第一章 三島中洲と阪谷芳郎

まず阪谷の経歴から確認しよう。一八六三年一月、漢学者の阪谷朗廬（一八二二～一八八二）の四男として備中後月郡西江原村（岡山県井原市）に生まれた阪谷は、一八七二年、母と東京に移住した。一八七三年一〇月、日本橋蠣殻町にある備中出身の箕作秋坪の洋学塾三又学舎に入り、東京英語学校（東京大学予備門）を経て、一八八四年に東京帝国大学文学部政治学理財科を卒業した。そして同年、大蔵省に入省した。以後、主計官（一八八六）、参事官（一八九一）、日本銀行監理官（一八九六）、主計局長（一八九七）、総務長官（一九〇一）、第一次桂太郎内閣の曾禰荒助蔵相の下での大蔵次官（一九〇三）など、順調に官歴を上昇させた。この間の一八八八年、洪沢栄一の次女琴子と結婚し、二男五女をもうけた。そして第一次西

園寺公望内閣で大蔵大臣（一九〇六～〇八）として初入閣を果たした。これは、帝国大学出身者として、また官僚出身者として、初めての蔵相でもあった。ちなみに第一次西園寺内閣には、二松学舎で中洲に学んだ山県伊三郎が通相、帝国大学で中洲に学んだ牧野伸顕が文相として入閣していた。中洲は自身と縁深い内閣の誕生に感慨を覚え、「書簡一六付属②（明治三九年一月一六日付）」（『関係書簡集』四八二頁）の通り、阪谷の他、牧野・山県にも同様の漢詩を贈呈した。そして後年、牧野と山県は財団法人二松義会の顧問に就任し、中洲と二松学舎を側面から支えていく。

その後、阪谷は第四代東京市長（一九二二～二五）、貴族院議員（一九一七～四一）、第二代専修大学長（一九二四～三四）および初代総長（一九三四～四一）などを歴任し、一九四一年一月に逝去した。阪谷は財団法人二松義会顧問（一九一一年三月）に象徴されるように、様々な企業・学校・団体に関わり、「百以上」の肩書きを持つ。「百会長」なる異名はそれゆえのものであり、まさに「岳父渋沢翁の善き後継者」に他ならなかった。

以上のような経歴の阪谷と中洲の関係性の原点は、郷里を同じくする漢学者、阪谷の父朗廬を介してである。中洲は朗廬の墓碑銘を記すなど、両者は「極めて御親密の間柄」であった。中洲は一八三〇年生まれであるため、阪谷から見ると、父親と

同世代に当たる同郷の先輩であった。いわば中洲と阪谷の出会い、朗廬を介して始まったといえよう。漢学および地縁が、この両者を結びつけたのである。中洲と阪谷は、さらに東京大学という高等教育機関でも、時間と空間を共有した。例えば一八八二～八三年にかけて、阪谷は同期の牧野伸顕とともに、中洲の「漢文学」を受講した。だからこそ中洲は彼らを「門人」と認識し、前述の通り、第一次西園寺内閣の誕生に際し、漢詩を贈呈したのであろう。漢学および地縁に加えて、中洲と阪谷は教育経験でも結ばれていたのである。

ここで具体的に両者の交流を見よう。まず『学校法人二松学舎所蔵資料』には、四通の中洲宛阪谷書簡が遺されている。書簡〇一〇五「三島中洲宛阪谷芳郎書簡（一八八四年七月八日）」は阪谷の孔子墓や泰山訪問の報告、書簡〇一〇六「三島中洲宛阪谷芳郎書簡（一八八四年二月一日）」は碑文の撰文や揮毫の相談、書簡〇一〇七「三島中洲宛阪谷芳郎葉書（一九〇八年一月一六日）」は訪問日時¹の打診、書簡〇一〇八「三島中洲宛阪谷芳郎葉書（一九〇八年一月一八日）」も訪問日時¹の打診に関する内容である。なお阪谷の日記を見ると、書簡〇一〇七および〇一〇八に関しては、彼が中洲を訪問した形跡はない。一九〇八年当時の阪谷は蔵相のポストに就いており、訪問日時¹の調整は難しかったようである。

『関係書簡集』には、両者の交流を読み取れるものが多い。

例えば「書簡三五（年月日不明）」（『関係書簡集』四九一～四九二頁）を見ると、中洲が阪谷を親類会に招待している。このような中洲と阪谷の関係は中洲の三男である復（一八七八～一九二四）にも受け継がれたようで、阪谷は「いろいろ御話を承つたり、又私の経営致して居ります備中館の御世話をお願いしたり致しました」と回想している。また財団法人斯文会では、両者ともに役員を務めている（阪谷は監事・復は常議員）。この斯文会は、洪沢栄一（一九一九～一九三一年に二松学舎舎長）・金子堅太郎（一九三二～一九四二年に二松学舎舎長）・牧野伸顕が顧問、嘉納治五郎（漢学塾二松学舎出身）が祭典部長、細田謙蔵（財団法人二松義会理事）・児島献吉郎（評議員からのちに二松学舎学長）が常議員を務めており、奇しくも二松学舎関係者が集う場にもなっていた。ちなみに前述の備中館だが、一九〇一年に阪谷が小石川原町の邸宅の隣地を寄付し、岡山県出身の馬越恭平（日本麦酒醸造社長）や大原孫三郎（倉敷紡績社長）らの寄付金で設立された、東京で学ぶ岡山県出身者のための寄宿舎である。成田龍一は寄宿舎を「故郷」意識が再生産される場所（装置）として位置づけたが、備中館がもともと阪谷の所有地に建てられたことを踏まえると、彼の「故郷」意識の強さがうかがえる。これに関して、「書簡三六（年代不明）」（『関係書簡集』四九二頁）を見ると、中洲はその備中館に四〇円の寄付金を拠出している。決して大きな金額では

ないが、中洲は阪谷の想いを理解し、可能な限り、彼を支えていたといえよう。

第二章 家庭人としての中洲

ここでは家庭人という視点から、書簡を時系列で分析する。

① 「書簡四（一八九一年七月九日付）」（『関係書簡集』四七六頁）。ワシントン法律大学を卒業した中洲の長男桂は、一八九一年七月三日に帰国していた。同月九日朝、中洲はその桂を連れて阪谷宅を訪問した。しかし阪谷は留守で、それを受けてしたためた書簡である。しばしば桂の放蕩ぶりは指摘されるが、事実、中洲は阪谷に「學術未熟」な長男の「御誘導」を願っている。だからこそ後述のように、中洲は阪谷に桂の仕官先の斡旋を依頼するのである。

② 「書簡五（一八九一年二月三日付）」（『関係書簡集』四七六頁）。一八九二年一月、その桂が二三歳で大隈重信の長女と結婚すると、阪谷は祝い品を贈呈した。これを受けて、中洲が同年二月六日（日）午後三時開催の披露宴に阪谷を招待する書簡である。阪谷の日記を見ると、彼が披露宴に参加していたことを読み取れる。桂の結婚により、中洲は立憲改進黨の創立者である大隈と縁戚関係を結ぶが、翌一八九二年一月、彼は早々に離婚してしまう（同年七月に小永井小舟の娘と再

婚²⁷。

③「書簡一〇（一九〇二年五月一八日付）」（『関係書簡集』四七八～四七九頁）。前述の二つの書簡からは少し時間が経過している。当時の桂は、定職に就いていなかったようである。そのような中、阪谷の仲介により、松本某という人物が中洲の「悴」を採用したという。中洲の実子は三人いたが、三男の復は東京帝国大学文科大学漢学科に在学中のため、桂が次男の廣になる。ただし後述の「書簡一一」および「書簡一二」を見る限り、この「悴」は桂を指すと思われる。放蕩息子の桂が定職（この時点では職場不明）を得たことから、中洲は松本某との面会を希望するとともに、阪谷に謝辞を述べた内容の書簡となっている。

これに関連して、「書簡一一（一九〇二年七月三日付）」（『関係書簡集』四七九頁）を見ると、桂は「日々出勤、仕事」に励んでおり、中洲は「長持」して欲しいと願う内容である。また「書簡一二（一九〇三年二月六日付）」（『関係書簡集』四七九～四八〇頁）を見ると、桂は「遊情も不致」、この半年間、真面目に務めていたことが分かる。しかし「書簡一二」の続きを見ると、官僚機構の改革により、桂は失職の可能性があった。そこで中洲は桂の新たな職場を模索し、阪谷に「古市長官」および「小林課長」との面会を仲介して欲しいと願っている。この古市が鉄道作業局長官の古市公威であるな

らば、この段階で初めて、桂の勤務先が同局であったことになる。阪谷は一八九六年四月に鉄道会議（鉄道担当官庁の諮問機関）の議員、一八九九年に鉄道国有調査会（首相の諮問機関）の委員を務めており、おそらく中洲は阪谷の鉄道行政に対する影響力を期待して、彼に仲介を依頼したのであろう。鉄道行政は、工部省（一八七二）、内閣（一八八五）、内務省外局（一八九〇）、通信省外局（一八九二）、通信省内局（一八九三）を経て、一八九七年、通信省外局の鉄道作業局（鉄道現業を担当）と内局鉄道局（鉄道監督を担当）に分離するなど、度重なる機構改革にさらされており、桂はその余波を受けたのである。なお前掲「書簡一〇」に登場した松本は、桂の勤務先が鉄道作業局であるならば、松本莊一郎と思われる²⁸。

そこで桂の就業状態を探るため、別途、「書簡一八付属（一九〇六年九月二三日付）」（『関係書簡集』四八三～四八四頁）を見ると、「通信省」という文言がある。つまり桂は前述の鉄道作業局を経て、通信省で勤務していたようである。この書簡を見ると、山口俊太郎なる人物に勧められ、桂は中洲に「高給」である「台湾彩票」（宝くじ）の「売弘」（広告）業への従事を相談したことが分かる。すると中洲は桂に対し、当時蔵相の阪谷に相談した上で、阪谷の「同意」があれば自分は「異存」ないと回答している。おそらく中洲は阪谷からの説得を期待していたのであろう。ただし桂は阪谷の前に「野崎ト申

仁」に相談し、「不同意」ゆえに山口の提案を断つたとも記されている。

ここに「阪谷芳郎宛三島中洲書簡（一九〇七年一月二日付）」を加えると、やはり桂が通信省に仕官していたことは確かとなる。すなわち中洲は「二月廿日迄二至り、神戸転任之辞令下り、俸モ廿五日同地へ赴く」のを喜ぶとともに、阪谷の他、中洲の門人である当時通相の山県伊三郎も関与しているとの文言がある。山県が存在を踏まえると、中洲は桂のために再び阪谷、さらには山県の助力を願い出て、通信省関連業務の職を斡旋してもらったのではないだろうか。以上から、中洲は長男である桂の就労に心を砕いており、それに対する助力を阪谷に期待していたといえよう。

④ 「書簡一四付属（一九〇五年一月一六日付）」（『関係書簡集』四八一頁）。ここでは次男の廣が登場する。阪谷と奥田義人が大学の同期（法学部）であったからであろう、中洲は阪谷經由で奥田に「直筆之書ニて、次男廣一件頼遣置候」としたため、面会を希望した。当時の奥田は代議士二期生（鳥取県鳥取市選挙区〈無名倶楽部〉）にして、農商務省参事官・特許局長・拓殖務次官・農商務次官・法制局長官を務めた経歴を持つ。この「一件」の内容は不明だが、おそらく中洲は奥田に対して、廣への何かしらの便宜を期待したものと考えられる。

本章での分析をまとめると、いかに放蕩息子であっても、桂

の行く末を案じ、阪谷らに職の斡旋を依頼するなど、親として支え続けた中洲の姿が読み取れよう。また詳細は不明だが、同様の愛情は次男廣に対しても注がれていた。特に桂の場合、菊地誠一が指摘したように³⁰、後年、一九一七年前後の時点で、桂は中洲の面倒を見たり、代理を務めていた。それは、桂なりの中洲に対する恩返しの一つだったのではないだろうか。

第三章 同郷者としての中洲と阪谷

ここでは同郷という視点から³¹、書簡を時系列で分析する。

① 「阪谷宛中洲書簡一四付属（一九〇五年一月一六日付）」（『関係書簡集』四八〇～四八一頁）。中洲は、知人（岡山県出身の植村徳太郎）の子が当時大蔵次官の阪谷との面会を希望しており、断り切れなかった。そこで阪谷に対して、自分も面識のない人物だが、時間があれば面会して欲しいと要望した書簡である。試みに阪谷の日記を確認すると、阪谷が植村なる人物と面会した形跡はなかった。たとえ中洲の依頼であっても、同郷であっても、身分保障がなければ面会していなかったようである。

② 「書簡一五（一九〇五年一月一七日付）」（『関係書簡集』四八一頁）。一九〇五年一月、中洲の「姪」日笠哲夫が自身の経営する日笠銀行の合資会社への変更の際し、大蔵次官である

阪谷の口添えを希望しているという内容である。中洲自身、縁故で容易に「事方出来ル」と考えている日笠に閉口しながらも、この書簡に関係書類を同封している。親族からの頼みゆえに、中洲も断りきれなかったのであろう。

③「書簡三六（年代不明）」（『関係書簡集』四九二頁）。中洲の母方の親族で、中洲養女の婿にも当たる小野静雄が、突然、中洲を訪問した。小野は阪谷との面会を希望しており、中洲にその「添書」を依頼していた。中洲によると、小野は「少々の資産有之」人物で、「糊口」のために阪谷と面会を希望している訳ではないと「保証」する。前述の書簡一四および一五では、やや辛辣な対応をした中洲だが、小野には信頼を寄せていた。一八七七年の二松学舎創立時、小野が会計を務めていたことはその証左である。実際に阪谷が小野と面会したか否かは、この書簡そのものの年代が確定できていないため、確認できなかった。

④「書簡三七（年代不明）」（『関係書簡集』四九二～四九三頁）。二松学舎での中洲の教え子の石川良道（一八五六～一九二七）の「添書」を持つ、中洲の郷里友人の子である横山昌次郎が阪谷を紹介して欲しいと希望している。石川は一九〇二年から一九一八年までの間、岡山県各地の官選郡長を歴任した地方官である。また横山は同志社を経てアメリカのイェール大学に留学後、博士学位（理財経済学）を取得した「前途有望」な

人物という。あまり乗り気ではなかった中洲だが、断り切れず、石川の「添書」を同封した。実際に阪谷が横山に面会したか否かは、同じくこの書簡そのものの年代が確定できていないため、確認できなかった。

⑤「書簡三九（年代不明）」（『関係書簡集』四九三～四九四頁）。岡山県出身者で、専門学校経済科という学校を卒業した奥元太郎なる人物が、阪谷との面会を希望する内容の書簡である。中洲によると、自分と「異派」の関係だが、奥は幼少時より学識ある「評判」の人物という。この奥が漢学者か否かは定かでないが、中洲が一目置く人物だった。実際に阪谷が面会したかどうかは、やはりこの書簡そのものの年代が確定できていないため、確認できなかった。

以上の五点の書簡から、阪谷の知遇を得ようとする人物は、枚挙に暇がなかった。漢学者の朗廬を父に持ち、しかも渋沢一族に名を連ねた阪谷は、学歴や官歴のみならず、爵位や豊富な肩書を持つ、まさに岡山県の逸材であった。その阪谷と親交のある中洲という存在は、立身出世を遂げようとする岡山県人、経済人として成功を収めようとする岡山県人から見た場合、極めて有効な接触回路だった。

ところで一九〇七年二月二十八日以降、蔵相の阪谷は、山県伊三郎（通相）と鉄道予算の編成で対立した。陸相の寺内正毅が仲介するも、一九〇八年一月一三日、両名とも辞職してしま

う^{3,4}。これを見た中洲は、「阪谷芳郎宛三島中洲書簡（一九〇八年一月一六日付）」の中で、「前進猶長養銳、再起之時」と書き記し、政治家としての再起を願っていた。その後、阪谷は第四代東京市長（一九二一―二五）に就任し、初めて高等文官試験合格者の中から助役（熊本県内務部長の高橋要治郎）を迎えるなど、東京市政史に大きな足跡を残した。阪谷は中洲の期待に応え、政治の世界で再起を果たすこととなる。

第四章 二松学舎との関わり

ここでは二松学舎での中洲と阪谷の関係を分析する。

まず『関係書簡集』ではないが、中洲が阪谷の父朗盧に差し出した「阪谷朗盧宛三島中洲書簡（一八七七年九月二十九日付）」を見よう。ここには「家事一件も未ダ因循、願書も不差出候へ共、伝聞シテ来学ヲ依頼スルモノ既二五、六輩アリ、追々来集と奉存候」とある。時期的には漢学塾二松学舎創立（一八七七年一〇月一〇日）直前で、極めて貴重である。どうやら創立前から、しかも願書完成前から二松学舎への入塾希望者が五〜六人はいたようである。山田方谷直系の陽明学者でもあり、大審院判事を退官したばかりの中洲の漢学塾は、社会的に大きな興味の対象となっていた。

ここで二松学舎の史的展開を少し整理したい。明治初期に多

くの私立学校が創立されたが、それらは教育令（一八七九年）および改正教育令（一八八〇年）、さらには諸「学校令」（一八八六年）など、政府による教育制度の影響を大きく受けていた。そして一九〇三年三月、第二次山県有朋内閣は専門学校令を公布するが、これにより専修学校（現専修大学）など、多くの私立学校が専門学校という高等教育機関に移行していった。

二松学舎の場合、一九〇三年七月に運営母体として二松義会が設立され、一九〇九年七月には財団法人に移行するなど、中洲の個人塾からの脱却が模索されていた。しかし一九一〇年一月一日、中洲の三男復が所有する二松学舎の校舎を二、六五九円で購入するなど、支出も多く、決して財政的に安定していた訳ではなかった。神立春樹が示すように、二松学舎は前述の教育令以降、明治日本社会と連繋することで存続し続けたが、卒業しても特典のない各種学校であることに変わりはなかった。このような状況下、二松学舎は財政の安定化を目指し、寄付金集めに奔走するのだが、そこで次の二つの書簡を取り上げる。

第一は、「書簡番号二〇（一九一〇年二月一七日付）」（『関係書簡集』四八四―四八五頁）である。二松義会評議員の尾崎嘉太郎（後に理事）によれば、洪沢栄一は三井物産社長の益田孝に対し、三井家から二松学舎への寄付を依頼するものの、「謝絶」されたという。そこで尾崎は入江為守・池田四郎次郎・速水柳平・細田謙蔵の二松義会理事などと協議した結果、

中洲に阪谷への相談を勧めた書簡である。なお、この書簡からは、阪谷の岳父である渋沢が二松学舎と関係を持っていたことも読み取れる。渋沢と中洲、さらには二松学舎との交差については、町泉寿郎の研究が詳しい。町によると、古希以前の渋沢にとって、中洲は気の置けない漢学者の一人に過ぎなかったが、古希以後、「道德経済合一」「義理合一」をめぐり、両者は急接近し、一九一〇年一月、渋沢は二松義会顧問に就任する⁴³⁴。

また、この書簡には二つの書簡が同封されていた。一つが「付属①三島毅宛早川千吉郎書簡」である。三井銀行常務取締役の早川千吉郎によれば、渋沢からの寄付依頼に対して、前述の益田孝は個人としては寄付できるが、三井家としての寄付は「御断」したという。そこで早川は、中洲に渋沢への相談を勧めた内容になっている。そして、もう一つが「付属②三島毅宛尾崎嘉太郎書簡」である。中洲は三井家から寄付がないことを「始メテ知り」困惑するものの、益田に断られた渋沢に「再応」させる訳にはいかないため、その渋沢への相談の可否も含めて、彼の娘婿の阪谷に「御任せ」したいという内容である。

以上三通の書簡から、二松学舎の寄付金集めが軌道に乗っていない中、中洲は阪谷に強く依存していたことを読み取れる。そこで一九一〇年七月七日の二松義会顧問会議の席上で、第二次桂太郎内閣文部大臣の小松原英太郎（岡山県出身）は義捐金募集を提案し、翌年からの実施を決定した。すると渋沢は真つ

先に三、〇〇〇円を寄付し⁴³⁵、他者が寄付に追随しやすい環境を整えたのである。残念ながら、この義捐金募集における阪谷の役割は判然としない。しかし渋沢が彼の岳父であることを踏まえると、少なくともその存在意義は大きかったのではないだろうか。

第二は、前述の義捐金募集に関連する「書簡番号二七（一九一二年一月二三日付）」（『関係書簡集』四八九頁）で、一九一一年一月一六日、小松原が東京市内の実業家を華族会館に招き、前述の義捐金を依頼した直後の書簡となっている。書簡を見ると、中洲は阪谷に対して、前述の早川千吉郎個人への義捐金「勧誘」を依頼している。そして早川には自身の書簡を用意するとともに、自ら三井家に義捐金を直談判する予定と述べている。どうやら前述の「付属②書簡」の後、中洲は早川からの義捐金は阪谷に任せ、三井家からのそれは自分自身で対応しようと考えていたようである。

中洲が実際に直談判したか否かは不明だが、この義捐金募集に関しては、二月四日、実業家同士の互選で、渋沢、株式会社大倉組社長の大倉喜八郎（新潟県出身）、日本勧業銀行総裁の山本達雄（大分県出身）、三菱合資会社管事の豊川良平（高知県出身）、大日本麦酒株式会社社長の馬越恭平（岡山県出身）が割当委員に就任し、大きく事態が動いた⁴³⁶。すなわち大倉一、〇〇〇円、浅野総一郎五〇〇円、山本五〇〇円、岩崎両男爵家

五、〇〇〇円、古河虎之助三、〇〇〇円、馬越一、〇〇〇円の寄付を承諾した。加えて村井長兵衛一、〇〇〇円、阪谷と同期の大蔵官僚で台湾銀行初代頭取や日本興業銀行初代総裁などを歴任した添田寿一、五〇〇円、安田善次郎三、〇〇〇円、博文館経営者で東京瓦斯取締役の大橋新太郎一、〇〇〇円、ヤマサ醤油社長の浜口吉右衛門一、〇〇〇円、東武鉄道取締役の原六郎五〇〇円、東京商業会議所副会頭の日比谷平右衛門五〇〇円の寄付も承諾されつつあった。さらに洪沢を通して、東宮（のちの大正天皇）より三〇〇円の下賜金も得られた。つまり前述の三井家からは義捐金を得られず、中洲の思惑通りには動かなかったものの、二松学舎は一定程度の寄付金を集められたのである。

しかし、これで二松学舎の財政が安定したわけではなかった。例えば一九一三年の寄付金は、わずか一七〇円に留ま⁴⁷っている。なぜ当時の二松学舎は、洪沢のような実業家、阪谷のような政治力のある人物に依存しなければ、寄付金を集められなかったであろうか。ここで「阪谷芳郎宛馬越恭平書簡（一九一一年二月二〇日付）」（『関係書簡集』四五六頁）を紹介したい。すなわち「二松学舎之儀二付而ハ、愚存之趣ヲ洪沢男爵へ上申致候所、御同意被成下、御尽力相成候間、此儀出来候上ハ、充分相談可申候、左もナクテハ、御辞儀キライの銭貰イハ漢学儒連ニは色々何歟と申事ニ六ヶ敷奉存候」とあり、一九一一年当

時、漢学や儒学を評価しない実業家がいたようである。現在の筆者には馬越の指摘の適否を論ずる準備はないが、少なくとも洪沢や阪谷のような人物を介在させなければ、漢学を教授する各種学校の二松学舎は、運営資金を集められなかったのではないだろうか。

したがって二松学舎にとって、阪谷は欠くべからざる存在であった。阪谷は洪沢ほどに前面に出ないものの、中洲の相談に乗るなどして、この学園の資金調達を裏面から支えていた。同時に二松学舎は、阪谷だけでなく、前述の馬越や小松原などの岡山県人脈に支えられていたことも忘れてはならない。小松原の場合、同郷の花房義質らの紹介で外務省に入省（一八八〇年）したという経験⁴⁸を踏まえると、彼は地縁の持つ意味を身をもって理解していただろう。加えて彼は、後年の一九一八年九月、前述の斯文会理事長に就任するなど、二松学舎や漢学と交差する立ち位置にあった。また馬越の場合、八才の時から阪谷朗廬（初代館長）の興讓館で漢学を学んでいた⁴⁹。朗廬の薰陶を受けた馬越もまた、漢学という学問で中洲と交差し、さらに財団法人二松義会の評議員を務めていた。当時の二松学舎はまだ国語科中等教員養成を目的の一つとする専門学校移行（一九二八年）の前であったことから、ここは岡山県出身者の立身出世の回路ではなかった。そのような二松学舎であつても、両者が寄付に応じた理由は、中洲の存在、さらには彼らを

結びつけた漢学という存在に求められるのではないだろうか。換言すれば、漢学を学んだ岡山県出身者にとって、中洲や二松学舎という漢学塾は、象徴的な結節点だったのではないだろうか。岡山県出身の中洲が東京で設立した二松学舎は、立身出世を果たしたこの地出身の在京者の地縁だけでなく、漢学という学問が生み出した人間関係によっても支えられていたといえよう。

おわりに

本稿では、阪谷宛三島中洲書簡を分析し、家庭人としての中洲、郷土を同じくする阪谷と中洲の関係、二松学舎と阪谷の関わり的一端を分析した。その結果、中洲と阪谷は、阪谷の父朗蘆を介した漢学に加えて、岡山県出身という地縁、東京大学の師弟関係など、極めて重層的に結びつき、終生、その関係を変えることがなかった。したがって日本近代、とりわけ明治期の日本社会では、同郷はもちろんのこと、漢学という学問、学校という空間で時間を共有した日々は、極めて大きい意味を持つていたといえよう。換言すれば、地縁だけでなく、学問・学校という回路もまた、当時の人間関係の媒介項であり、潤滑油でもあった。特に中洲の場合、それらは家族のため、さらには自身が創設した二松学舎のためにも活用されており、個人

的・教育的・社会的資源の一つであった。したがって今後、同郷者同士の連携を分析する際、「はじめに」で紹介した永江雅和の先行研究同様、本稿で示したような重層的な視点を併用する手法が必要不可欠になるのではないだろうか。

中洲は一九一九年五月一二日、九〇歳で鬼籍に入るが、その存命中、二松学舎が専門学校に移行することはなかった。二松学舎の支柱である中洲の死を受けて、阪谷は日記に「三島毅先生逝去」と短く書き込んだ。中洲の後継者である三男復もまた、五年後の一九二四年二月一日、わずか四六歳で鬼籍に入る。やはり阪谷は日記に「三島復死去告別式」と短く書き込んだ。中洲とその後継者である復の死は、漢学を学んだ岡山県出身者にとっての結節点たる二松学舎と阪谷の關係に、どのような変化をもたらすのであろうか。そして、それは今後の二松学舎のあゆみにどのような影響を与えるのであろうか。これらは本稿の課題を超えるものだが、阪谷の下には、二松学舎専門学校初代校長の山田準からの四通の書簡（一九三二―一九三三年）が残されている。また二松学舎大学附属図書館も阪谷が山田準に宛てた書簡を所蔵している。山田個人を介してであろうが、少なくとも二松学舎との関係は途切れていなかったようである。

以上は、専門学校移行後の二松学舎史をめぐる問いの一つとしても位置づけられよう。課題は多い。他日、別稿を期したい。

(付記)

本稿は、二〇一五年二月二十八日(土)の第一一二回三島中洲研究会での報告に加筆・修正を施したものである。この場を借りて、多くのコメントを寄せて下さった参加者の方々に対し、御礼申し上げる。

(注)

- (1) 阪谷家文書の全体像、さらにはこの史料の性格などに関して、櫻井良樹「解題 阪谷芳郎の遺した文書」(専修大学編『阪谷芳郎関係書簡集』芙蓉書房出版、二〇一三年)に詳しい。
- (2) 竹永三男「県人会・郷土雑誌考」(『山陰地域研究』第一号、一九八五年)、同「同郷会の成立」(高井悌三郎先生喜寿記念事業会編『歴史学と考古学』真陽社、一九八八年)。
- (3) 成田龍一「故郷」という物語―都市空間の歴史学―(吉川弘文館、一九九八年)一五―一六頁。
- (4) 清水唯一朗『近代日本の官僚―維新官僚から学歴エリートへ―』(中公新書、二〇一三年)三二―三二七頁。
- (5) 内山一幸『明治期の旧藩主家と社会―華士族と地方の近代化―』(吉川弘文館、二〇一五年)二八五頁。
- (6) 拙著『昭和戦前期の選挙システム―千葉県第一区と川島正次郎―』(日本経済評論社、二〇一九年)。
- (7) 永江雅和「解題 阪谷芳郎を巡る人的ネットワーク」(前掲『阪谷芳郎関係書簡集』)。
- (8) 永江雅和「阪谷芳郎の人的ネットワーク―専修大学所蔵阪谷芳郎関係書簡から―」(『神園』第一号、二〇一四年)。

- (9) 拙稿「『三松学舎史』研究と『自校史』授業」(『三島中洲研究』第六号、二〇一四年)。
- (10) 主に「故阪谷子爵略年譜」(『斯文』第二四編第二号、一九四二年)二―五頁および「阪谷芳郎年譜」(『阪谷芳郎伝』故阪谷子爵記念事業会、一九五一年)六九―七四頁によった。
- (11) 『三松学舎九十年史』(学校法人二松学舎、一九六七年)一四四頁および一五一頁。
- (12) 前掲『三松学舎九十年史』一四四頁。
- (13) 榎忠一郎「阪谷子爵の業績につき懐古」(『斯文』第二四編第二号、一九四二年)二三頁。
- (14) 前掲『阪谷芳郎伝』六一―二頁。
- (15) 阪谷芳郎「中洲先生及雷堂先生祭典後講話」(『三松』第二号、一九二九年)九頁。
- (16) 前掲「中洲先生及雷堂先生祭典後講話」一四頁。
- (17) これは、町泉寿郎「二松学舎大学附属図書館蔵『三島中洲関係書簡』其一」(『三島中洲研究』第六号、二〇一四年)一四七頁で翻刻されている。
- (18) これも前掲町「『三島中洲関係書簡』其一」一二六頁で翻刻されている。
- (19) 「日記一九〇八年一月」(国立国会図書館憲政資料室蔵「阪谷芳郎関係文書」R四七)。
- (20) 前掲「中洲先生及雷堂先生祭典後講話」一〇頁。
- (21) 以上、「財団法人斯文会職員」(『斯文』第一編第三号、一九一九年)。なお頁数は記されていない。
- (22) 前掲『阪谷芳郎伝』六三八頁。
- (23) 前掲成田「故郷」という物語」一二四頁。
- (24) 例えば『三島中洲と近代 其三』(二松学舎大学図書館、二〇

- (25) 一五年)二頁(町泉寿郎解説)
 「三島中洲年譜」(『三島中洲と近代 其一』(二松学舎大学附属図書館、二〇一三年)八一頁。
- (26) 「日記(一八九一年二月六日条)」(前掲「阪谷芳郎関係文書」R四七)。
- (27) 前掲「三島中洲年譜」八三頁。
 戦前期官僚制研究会編『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』(東京大学出版会、一九八一年)二二二頁によると、松本は一八四八年五月生。開成学校を経て、一八七〇年渡米。鉄道庁第二部長(一八九〇年)、通信省外局鉄道局長官(一八九三年三月)、通信省鉄道局長(一八九三年一月)を経て、通信省外局鉄道作業局長官(一八九七年)。一九〇三年三月に逝去。第二次世界大戦後の幣原喜重郎内閣で憲法改正問題を担当した松本丞治国務大臣の父でもある。
- (28) 前掲「阪谷芳郎関係文書」R七。この文書の中には、阪谷宛中洲書簡が合計五通残されている。
- (29) 菊地誠一「三島中洲年譜補訂の一試論」(『三島中洲研究』第六号、二〇一四年)一一四頁。事実、二松学舎大学附属図書館蔵「大正六年二月二五日付山田準宛三島桂書簡」(F二九一七六一)を見ると、中洲は桂とともに東京府荏原郡大井町で暮らしている。なお、この書簡は前掲「三島中洲と近代其三」三四頁に採録されており、それを参照した。
- (30) なお犬丸鐵太郎(岡山県青年会副会長)によれば、阪谷は「岡山県人だ、岡山県の阪谷だ」(前掲「阪谷芳郎伝」六三七頁)と述べており、強い郷土意識を有していた。阪谷が興讓館総理に就任(一九〇五年四月一日付)したことは、その象徴である。
- (31) 「三松学舎百年史」(学校法人二松学舎、一九七七年)二二二頁。前掲「二松学舎九十年史」一一二頁によれば、小野は一八七九年まで会計を務めた後、一八八〇年に職員および幹事になる。しかし以後は、二松学舎の人事には登場しない。おそらく郷里に帰り、時を経て、再び上京したのではないだろうか。阪谷とはほぼ同世代の岡山県人としては、政界の場合、平沼騏一郎(一八六七〜一九五二)・犬養毅(一八五五〜一九三二)・宇垣一成(一八六八〜一九五六)・小松原英太郎(一八五二〜一九一九)などが挙げられる。しかし犬養と小松原は阪谷よりも年長で私学出身、宇垣は陸軍大学校を一九〇〇年に卒業するなど、学歴を中心に、その政治的資源が阪谷とは異なる。平沼は一八八八年に帝国大学法科大学卒業を卒業しているものの、実父は一介の藩士に過ぎず、阪谷とは置かれた立ち位置が異なる。したがって当時の阪谷は、岡山県出身者の中でも、誰よりも目置かれた存在だったといえよう。
- (32) 前掲「阪谷芳郎伝」三〇九〜三一三頁。
- (33) 前掲「阪谷芳郎関係文書」R七。
- (34) 櫻井良樹「解題 大正初期の東京市政と阪谷芳郎」(『阪谷芳郎 東京市長日記』芙蓉書房出版、二〇〇〇年)六一六頁。
- (35) ただし高等文官試験合格官僚を東京市助役に迎えるに当たり、その支持と合意を取りつけるためにも、市長は市会に強い基盤を持たなければならなかった。阪谷が始めたこの試みは、第六代東京市長を務めた田尻稻次郎の時代に挫折するが、第七代市長の後藤新平の時代に不可逆的に確立した。詳細は、拙稿「東京市・市長と市会の政治関係―田尻市政期における政治構造の転形―」(『日本歴史』第六四九号、二〇〇二年)を参照。
- (36) 前掲「阪谷芳郎関係文書」R七。
- (37) 前掲「阪谷芳郎伝」三〇九〜三一三頁。

- (38) 「子の関係尽力した学校は、専修大学、大倉高等商業学校、日本女子大学校、興讓館、二松学舎等」(前掲『阪谷芳郎伝』六三四頁)とある。
- (39) 山下五樹『朗盧先生宛諸氏書簡集』(柳本書房、一九九三年)二六三頁。なお国立国会図書館憲政資料室蔵「阪谷朗盧関係文書」の中には六九〇通の朗盧宛書簡が残されており、この内、中洲が差し出したものは二四通ある。
- (40) 神立春樹『近代日本制度外学校史論―各種学校の社会的連繫―』(教育文獻刊行会、二〇一八年)六二頁。
- (41) 『二松学舎六十年史要』(財団法人二松学舎、一九三七年)一〇六―一〇七頁。
- (42) 前掲神立『近代日本制度外学校史論』終章。
- (43) 町泉寿郎「近代の漢学と社会貢献事業―洪沢栄一と三島中洲の交流から―」(『大倉山論集』第六五輯、二〇一九年)一一頁。
- (44) 前掲『二松学舎九十年史』一四六頁。
- (45) 前掲『二松学舎九十年史』一四七頁。
- (46) 以上、前掲『二松学舎九十年史』一四七―一四八頁。
- (47) 前掲『二松学舎百年史』三二〇頁。
- (48) 有松英義編『小松原英太郎君事略』(木下憲、一九二四年)四六頁。
- (49) 斯文会編『斯文六十年史』(斯文会、一九二九年)三一九頁。
- (50) 大塚栄三編『馬越恭平翁伝』(馬越恭平翁伝記編纂会、一九三五年)一九頁。
- (51) 「日記(一九一九年五月一二日条)」(前掲「阪谷芳郎関係文書」R四九)。
- (52) 「日記(一九二四年二月三日条)」(前掲「阪谷芳郎関係文書」R五〇)。
- (53) 「阪谷芳郎宛山田準書簡」(国立国会図書館憲政資料室蔵「阪谷芳郎関係文書(第二次受入分)」五三七六―五三七九)。
- (54) 前掲『三島中洲と近代 其三』六七―六八頁には、三通の書簡が翻刻されている。